

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：23901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770081

研究課題名(和文)近世後期読本における考証・批評と創作との連関に関する研究

研究課題名(英文)A study on the relation between historical research and critique and creation in the Late "Yomihon" Books

研究代表者

三宅 宏幸 (MIYAKE, Hiroyuki)

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号：90636086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本近世における小説を対象として、その作品内容と作品を著述した作家による考証や小説批評といった営為がどのように関連するのかを調査・検証したものである。

特に研究課題として取り上げた曲亭馬琴の小説『朝夷巡島記全伝』では、馬琴が考証随筆として出版した『烹雑の記』や『玄同放言』などに記された「ヒルコ」考証が、作品の全体構想に関わることを明らかにした。他にも、好華堂野亭の戦記「図会もの」に中国小説を絡める際に、作者の「義仲」批評が関係していると思しき記述も看取できた。

以上のように、作者による考証・批評に作品の根幹にも関わるものが見受けられることから、両者の関連はさらに研究すべきといえる。

研究成果の概要(英文)：In this study, I investigated and verified how the work related to the novel by the writer who wrote the content and the work was researched and the novel criticism by the target of Japan early Modern age.

Especially, in the novel of Kyokutei Bakin's "Asaina Shimameguri no ki" taken up as a research topic, it was clarified that "Hiruko" historical investigation which was written to "Nimaze no ki" and "Gendou hougen". that Bakin published as a historical research essay related to the whole idea of the work. In addition, the description which seems to be related to the author's "Yoshinaka" criticism was able to be they when the Chinese novel was politicizing to the Koukadou Yatei's "Zuemon".

It can be said that the relation of both should be researched further because the one related to the basis of the work is seen as described above by the author in the historical investigation and the criticism.

研究分野：日本近世文学

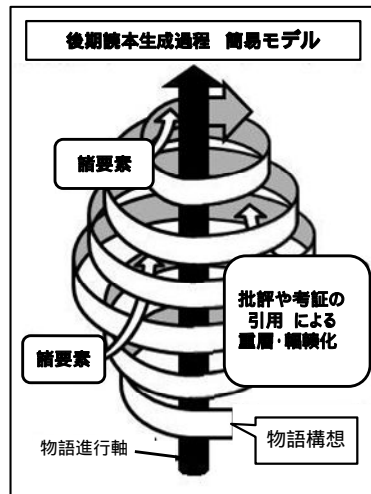
キーワード：読本 曲亭馬琴 考証随筆 批評 好華堂野亭 八犬伝 巡島記

1. 研究開始当初の背景

「後期読本」は山東京伝『忠臣水滸伝』（寛政 11〔1799〕年刊）以降に著述された中長編の作品群と言われる。読本は、和漢の知識・思想を緻密に盛り込み、大胆な構想や趣向で物語を描き出すため、作品にどのような典拠が利用されているかが重要であるが、山口剛氏が読本を「何等かの形式に於て中国の小説を模倣すること」（1927年）と定義して以来、中国文学関連の探索が研究の主流である（麻生磯次氏、徳田武氏等）。しかし、後期読本作者は創作だけでなく、考証随筆や小説批評を執筆する。近世後期は考証学が花開いた時期で、大田南畝や山東京伝、曲亭馬琴、石川雅望、柳亭種彦などの面々が考証随筆という形で刊行して披露し、馬琴などは中国白話小説や読本の批評を執筆している。したがって、考証学や批評執筆、あるいは研究という営為によって培った学問的知識や思想を作品に盛り込む可能性が十分考えられる。

2. 研究の目的

本研究「近世後期読本における考証・批評と創作との連関に関する研究」の主要目的は、近世後期の享和、文化、文政、天保期に刊行された読本について、作者自身や他者による考証・批評、学問研究などの介在はあるのかという観点から、各作品の成立過程を分析し、それらの作品が読者にどのように解釈されるのかを把握することにある。



このテーマに取り組むために、申請者は以下3点のアプローチを設定し、調査・考究していく。第1に曲亭馬琴、石川雅望の読本の研究、第2に山東京伝、柳亭種彦の読本についての研究、第3に暁鐘成、好華堂野亭、岳亭丘山の読本についての研究、である。

3. 研究の方法

初年度にあたる2014年度は、申請者がこれまでに収集した資料に加え、新たな文献を収集・調査し、それを馬琴や雅望の考証と読本との連関関係について分析を施す。さらに、2年目に当たる2015年度に行う調査のために、文献の複写などの作業を並行して行う。そして収集した資料や書誌調査を基に、デー

タベースの構築を図る。具体的には、書誌調査カードのスキャンなどを行う。

同様に、2015年度は京伝や種彦における考証学と読本との関係について調査し、2016年度は、鐘成や丘山、野亭における考証と読本との関係について検証を行う。

4. 研究成果

本研究では日本近世における小説を対象として、その作品内容と作品を著述した作家による考証や小説批評といった営為がどのように関連するのかを調査・検証してきた。

- (1) 馬琴は考証随筆『燕石雑志』（文化 8〔1811〕年刊）、『烹雑の記』（文化 8年刊）、『玄同放言』（文政元〔1818〕年刊）を執筆し、かつ数種の小説批評を著している。馬琴の考証については、研究史上においても早い時期に著されたもので、後世における評価も高い。しかし、馬琴の考証と読本については、例えば大高洋司氏の論考によっていくつかは分析されているものの（「文化七、八年の馬琴—考証と読本—」1995）、文化期の考証が中心で文政期の『玄同放言』の検証は少なく、学界においても網羅的な研究が為されていないのが現状である。馬琴の考証随筆は多くの資料や研究書を博搜して記され、彼の思想や歴史観が表れた第一級資料である。それら考証の実態を踏まえた上で、読本への影響を解明することを目的とする。そして具体的には、『朝夷巡島記全伝』（文化 12〔1815〕年刊）を対象に比較・検証を行った。馬琴が著した考証随筆『玄同放言』（文政元〔1817〕年刊）に「夷三郎」の考証がある。この夷は、元は記紀神話に登場する「蛭子」（ヒルコ）に由来し、肢体が不自由な「蛭子」は「蛭（ひる）」のような「子」とする解釈が当時大勢を占めていた。だが馬琴は、荻生徂徠の考証を踏まえながら、ヒルコは「日子」、つまり天照大神と対応する男の太陽神で、不自由なのは貴種の神性を示すと解釈した。この考証が、『巡島記』の主人公朝夷三郎義秀と関わってくる。彼は幼少期が「蛭児の神に異ならで」と表現される赤子であり、馬琴の創作である『巡島記』の主人公と、同時期の「ヒルコ」考証との連関性がうかがえる。そしてその関連は、義秀の運命や物語の構想とも深く関わる趣向として組み込まれていることを明らかにした。
- (2) 京伝は『近世奇跡考』（文化元〔1804〕年序）や『骨董集』（文化 11年刊）といった考証随筆を執筆・刊行し、また石川雅望には『蛾術斎漫筆』（成立年不明）なる写本の随筆が残る。それらを踏まえた上で、彼等の作品に考証の影響があるのかを検証した。京伝による考証と作品との連関に関しては、京伝自身の読本『安積沼』（享和三〔1803〕年刊）に見

える地名や作品中の趣向に考証の影響が見えることを確認し、また他作者については、二世岳亭丘山の作品『敵討腕野喜三郎』(万延元〔1860〕年刊)が京伝の随筆『近世奇跡考』を契機に既存の絵本などに見える様々な型を利用していることが明らかになった。また雅望についても、考証随筆『蛾術斎漫筆』の記述の中に中世説話『宇治拾遺物語』などの書名が見え、それらの作品と雅望読本『近江泉物語』(文化5年刊)との関連を見出すことができた。これらの考証と作品との趣向がどのように影響しあっているのかが今後の課題といえる。

- (3) 好華堂野亭の作品、主に『楠正行戦功図会』(文政4〔1821〕、7年刊)、『義経勲功図会』(文政8、9年刊)、『木曾義仲勲功図会』(天保4〔1833〕、9年刊)を扱い、それらいわゆる「図会もの」作品を対象に、野亭の特徴を炙り出した。従来、軍記物語を図会化した作品は秋里籬島によって『源平盛衰記図会』(寛政6〔1794〕年刊)、『保元平治闘図会』(享和元〔1801〕年刊)、『前太平記図会』(享和3年序)などが刊行されていたが、先行研究では横山邦治氏が述べているように軍記物語の「敷き写し」という評価であった。しかしながら、野亭は自作の「図会もの」において、『通俗三国志』(元禄5〔1692〕年刊)、『通俗漢楚軍談』(元禄8年刊)といった通俗軍談を故事や趣向として利用していることが、調査によって明らかになった。さらに、野亭の遺作である『扶桑皇統記図会』(嘉永2〔1849〕、3年刊)にも『通俗三国志』由来の趣向が看取できたが、その際の内容には誤りも見られた。したがって、野亭は著述の際に机上に通俗軍談を置いたのではなく、記憶から利用していたと想像される。野亭にとって中国小説は近い存在だったと考えることができ、今後も調査を続けるという課題も見えた。

以上のように、作者による考証・批評に作品の根幹にも関わるものが見受けられることから、今後も両者の関連はさらに研究すべきであり、継続課題といえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

1. 三宅宏幸、「好華堂野亭 図会もの と通俗軍談」、『説林』65、pp81-101、2017・3(査読なし)。
2. 三宅宏幸、「宮本武蔵もの 実録の系統分類」、『愛知県立大学日本文化学部論集』8、pp109-134、2017・3(査読なし)。
3. 加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸「くずし字による古典教育の試み—日本近世文学

会による出前授業—」、『名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要』61、pp134-142、2016・12(査読なし)。

4. 三宅宏幸、「馬琴の考証と読本—『朝夷巡嶋記全傳』論—」、『近世文藝』102、pp15-29、2015・7(査読有り)。
5. 三宅宏幸、「一英斎芳艶「文治三年奥州高館合戦白衣川白竜昇天」図論— 八犬伝 との連関—」、『同志社国文学』81、pp164-177、2014・11(査読なし)。
6. 三宅宏幸、「中西堂の実録写本」、『日本文学』63-10、pp35-45、2014・10(査読有り)。

〔学会発表〕(計4件)

1. 三宅宏幸、「浮世絵の文学的背景」、『ミエニヨ大学学術交流、於ミエニヨ大学(ポルトガル・ブラガ)』2017・3・8。
2. 三宅宏幸、「宮本武蔵もの 実録の展開」、『日本近世文学会、於信州大学(長野県松本市)』2016・11・13。
3. 三宅宏幸、「馬琴文学と西洋技術—千里鏡 による覗き—」、『スペインセミナー、於愛知県立大学(愛知県長久手市)』2015・1・13、14。
4. 三宅宏幸、「一英斎芳艶「文治三年奥州高館合戦白衣川白竜昇天」図考—『八犬伝』との連関—」、『絵入本ワークショップ、於同朋大学(愛知県名古屋市)』2014・7・6。

〔図書〕(計1件)

1. 三宅宏幸、「馬琴読本『俠客伝』における西洋光学機器—千里鏡 による覗き—」、『上川通夫・川畑博昭編『日出づる国と日沈まぬ国』、勉誠出版、pp286-306、2016・3。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三宅 宏幸 (MIYAKE, Hiroyuki)

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号：90636086

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()